

血清に、あきらかに抗LH作用が認められるものもあつて、臨床的応用には程遠い。

そこで私共は、更年期婦人尿からカオリン吸着による抽出の後、2つの DEAE-C および1つの Sephadex カラムで分離した高純度の FSH で免疫した家兎血清を HCG および Peduex (3才以下の小児尿抽出物) で吸収し、生物学的の中和実験および血清学的検査で特異的と思われる抗FSH血清を得た。一方、尿FSHを Latex 顆粒に吸着し、Latex 凝集反応阻止試験系を作り、これにより尿FSHの測定を試みた。比較的純粋な尿抽出物 (Pergonal-26, 28, Ortho-HMG, およびわれわれのFSH分画) を用いると、免疫学的および生物学的測定の結果は一致した。しかし尿抽出物を用いると免疫学的FSH活性は生物学的のそれより常に高かつたが、その比率は大体一定している。この結果は、生物学的にFSH活性を持たないが、免疫学的に活性な物質が尿抽出物中に存在することを示唆しており、種々の抽出法が検討されつつある。

質問 (神戸大) 望月 真人

1. 尿中FSHが Immunological activity と Biological activity の一致しない理由。
2. そういつた事に対してどの様な検討がなされていますか。

答弁 (群馬大) 玉田 太朗

1. 血中Gと尿中Gの比較は行っておりません。血中Gのスライドと誤解されたのは、尿からのGの比較的精製品に関する成績です。
2. 少なくとも本日示しましたデータから、尿のGでもある程度精製すると血清反応に影響する因子を少なく出来るのではないかと推測されます。

11. FRC-P による LH-immunoassay

(東京大) 小林 隆, 小林 拓郎
木川 源則, 雨森 良彦, 市川 尚

Gonadotropin 就中 Luteinizing hormone の測定は、臨床内分泌学の研究に重要な問題で、従来生物学的測定法 ventral prostate bioassay 法がとられ、近年 Parlow によつて開発された OAAD 法により急速の進歩がみられた。しかしこれらは、実験動物を使用するため、時間的に又費用の面で未だ難点があり、尚、新しい方法論的發展が望まれるところである。

一方近年蛋白化学、免疫化学の進歩により下垂体ホルモンの純化抽出が可能となりつつあり、下垂体前葉ホル

モンの免疫学的測定が試みられるようになってきた。

下垂体LHの純化には未だ問題があり、この測定は困難であつたがLHは Human Chorionic Gonadotropin と交叉反応を示すことからHCG抗体を使用してLHの免疫学的測定が興味ある問題となつてきた。

我々も FRC-P を試用して赤血球凝集抑制反応によりヒト下垂体LHを測定したのでここに報告する。

FRCとは H_2O_2 によつて固定された赤血球であり最初舟木により命名されカタラーゼ反応固定赤血球ともよばれている。測定LHは一方 Parlow OAAD 法によつても定量し比較検討した。

9, 11に対する追加 (大阪大) 谷沢 修

すでに西日本内分泌学会で報告した如く、市販HCG製剤を比較的純化し8000 iu/mg とした後、 ^{131}I で標識、200~300 $\mu\text{Ci}/\mu\text{g}$ の specific activity の ^{131}I -HCG を調製、double antibody technique による Radioimmunoassay を行うと、2, 3の標準品に於て0.0003~0.2 IU/cc (HCG) の測定域を得た。これで正常月経周期婦人の早朝尿を2周期にわたり測定すると、BBT上昇時に20~30iu/l の鋭い peak を見た。本法によれば尿の濃縮を要しないので各例の recovery を考慮する事なく行いうると、被検液が少量 (0.5cc) ですむ為血清中の level 等の測定に将来有用である。LHの測定にHCGを standard として使用し得るか否かは、尚検討を要する点がある。

追加 (神戸大) 望月 真人

我々も科研の FRC-P を使用しその感度の高い事を認めています。偽陽性を防ぐ為に小児尿を使い、稀釈して用いています。大体妊娠4~5週で高率で陽性を呈しますので、妊娠のごく初期の補助診断に使用していません。

追加 (北海道大) 藤本征一郎

Ouchtenlony (ゲル内拡散法) に於て Are は単一でなく、一方 Immuno-electrophoresis に於て、単一の Are が出ているのはどの様なわけですか。ゲル内拡散法には非特異的な尿蛋系の抗原抗体反応が関与しているものと考えます。

12. 抗ゴナドトロピンの臨床的研究

(新潟大) 小田島栄一

ゴナドトロピン、特に異種蛋白ホルモンである妊馬血清性ゴナドトロピンに関してはその臨床的価値は高くみられているが、常に抗ホルモン作用が問題とされる。不